

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K18357

研究課題名（和文）現代香港と台湾における固有言語の書記言語化プロセスとメカニズムの解明

研究課題名（英文）The process and mechanism of the growth of Taiwanese and Hong Kong Cantonese as new written languages

研究代表者

吉川 雅之（Yoshikawa, Masayuki）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30313159

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではもともと音声言語として存在していた香港の固有言語（広東語）と台湾の固有言語（台湾語）について、現代の文学作品を基礎資料として、書記言語化がどのように進んだかを考察した。それと並行して、19世紀から現代に至る粵語の文字表記の特徴の史的変遷を文学作品以外の文献（主に言語学習教材および辞典・語彙集）に基づいて明らかにし、かつ書記言語化に関連する諸現象についての考察を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、研究課題名に含まれる「現代」にとどまらず、急速な書記言語化が進んだ時期に至る前の時期まで視野に入れ、時間幅のより長い通時的視点から分析と考察を行うことができた点が挙げられる。社会的意義としては、香港文学と台湾語文学を主題とした授業で、本研究で得られた知見を受講者と共有することで、大学教育への還元を行うことができた。また、事典の項目解説で早期の字体の特徴について言及し、研究成果を社会に還元することにも努めた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined how Hong Kong Cantonese and Taiwanese Southern Min, which were existing solely as spoken languages originally, grew to be written languages, using contemporary literary works as basic materials. In addition, we clarified the historical transition of the characteristics of written form from the nineteenth century to modern times based on literature other than literary works, and carried out research on phenomena related to the 'writing' using spoken languages.

研究分野：言語学

キーワード：書記言語論 ダイグロシア 現代文学 文体 書面粵語（書面広東語） 書面台湾語 用字法 表記法

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現代に於いて、漢語派(中国語系)の言語が音声言語(話されることば)として常用されている社会では、書記言語(書かれたことば)は標準中国語のみが担っており、各地の音声言語で能動的に書くという営みは通常見られない。しかし、その例外たる社会として香港と台湾を挙げることができる。過去数十年間に亘り、香港では粵語(即ち広東語)、台湾では閩南語・ホーロー語(狭義の台湾語。以下、台湾語と称する)や客家語で記すことが、相異なる幾つもの媒体で持続的に実践されてきた(吉川 2020)。文学作品に限定したとしても、これらの言語で記された作品の数は累計で既に無視できない多さとなっている。この事実は、香港粵語や台湾語の書記言語化という現象が完成段階に向かいつつあることを物語っている。しかし、音声言語が書記言語化する過程と仕組みは、従来不問に付されてきた。こうした状況を背景として、もともと音声言語として存在していた香港の固有言語(粵語)と台湾の固有言語(台湾語)が書記言語化を果たした過程と仕組みを解明しようとする本研究の端緒が開かれた。

2. 研究の目的

香港粵語と台湾語の書記言語化は、ともに長期に亘って徐々に進行してきた現象であるが、20世紀最後の約10~20年間およびそれ以後という短期間には加速度的に進行した。これには香港粵語や台湾語で記された文学作品の増加が大きく寄与している。図書という媒体について言うと、粵語が文もしくはそれ以上の大きな言語単位で以て文字化された文献は、第二次世界大戦以前には聖書や教理問答といった宗教文書と外国人向け言語学習教材および辞典・語彙集がその大多数を占めたのに対し、現在では文学なかならず小説が大多数を占める。台湾語についても、文もしくはそれ以上の大きな言語単位で以て文字化された文献の中核を担うのは、現在のところ文学である(但し「國民中小學九年一貫課程綱要」に従い台湾語・客家語・原住民語のいずれかが小学校の必修科目となった2001年度以後は小学校用の学習教材も一定数を占めている)。そこで、本研究では香港粵語と台湾語が過去数十年間で急速に書記言語化を果たした過程と仕組みを、香港で刊行された粵語文学作品と台湾で刊行された台湾語文学作品を基礎資料として、文字表記と語彙から明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は以下の作業を中心に進めた。(2)は急速な書記言語化が進んだ時期に至る前の時期について諸特徴を明らかにするものであり、(1)で得られた分析結果を急速な書記言語化が進む前段階まで含めたより包括的な視座から解釈することを可能にするものである。

(1) 1980年代およびそれ以後の文学作品について考察対象とする図書を選定し、その文字データを作成し、文字と語彙について分析を行う。粵語文学作品については、粵語が台詞にのみ出現するか、それとも本文全体を覆っているかにも留意する。

(2) 言語学習教材および辞典・語彙集について文献学的情報を精査した上で表記に関する特徴を調べる。

(3) 音声言語の書記言語化を解明するモデルを立案する。

4. 研究成果

主な研究成果は以下のとおりである。

(1) 文学作品について

粵語文学作品について、1980年代の図書4点、1990年代の図書4点、2000年代の図書3点、2010年代の図書3点の文字データを作成した。台湾語文学作品については、1990年代の2篇と2010年代の2篇の文字データを作成した。そして、文字と語彙の出現頻度について分析を行い、通時的変化についての考察を進めた。

考察で得られた知見の一部分は2023年3月にシンポジウム「跨粵—跨領域粵語書寫研究國際研討會」での口頭発表「關於粵語書寫歷史分期的構想」で述べた。

また、近年出版された粵語文学作品に、初版と異版とで粵語の出現様式が異なるものが有ることを発見したため、両者の違いが何に起因するものか考察を進めた。これは本研究の研究期間開始時点では予想されていなかった事柄である。

(2) 言語学習教材および辞典・語彙集について

1938年から2012年までに日本国内で刊行された粵語学習教材約60点を基礎資料として、粵語に特徴的な語彙がどのように文字表記されてきたかを調査し、調査結果の一部分を論文「粵語(広東語)教材史概観—日本国内刊行の市販教材を対象として」(2023年)にて示した。そこで得られた主要な知見は次のとおりである。(1)全ての教材で一貫して同一字体で表記された語

は少数であるが、しかし字体が未統一の語もバリエーションは少数に限られていた。(2) 20 世紀前半には字体が未統一であった語も、1980 年代以後は統一へと向かう傾向が見られる。(3) 特徴的な語彙の字体の組み合わせによっては、時期を特定することができる場合がある。

その後、論文「粵語(広東語)に特徴的な語形の漢字表記に見られる特徴 日本国内刊行の市販語学教材を通して」(2024 年)では、粵語に特徴的な別の語彙について通時的考察を行い、日本国内で刊行された粵語学習教材には同時期の香港で刊行された辞典と異なる字体を用いたものが少なくないことを指摘した。

辞典・語彙集については、粵語に特有な字体を生産する有力な手段である「口偏の付加」が通時的にどのような機能を有してきたを解明すべく、19 世紀中期の『英語集全』を基礎資料とした考察を行い、音声・音韻についての規則を導き、論文「《英語集全》加口形字攷 以 切字撮要 /e/系列韻母爲主」(2021 年)にて示した。

(3) 中華圏の音声言語の書記言語化について

近現代の中華圏に於いて音声言語で綴るといふ営みがどの程度まで可能であったかについて、通言語的に状況を整理した。そして、漢語派と非漢語(少数民族語)の間で、更には漢語派同士で、文字化される方法がどの様に異なるかを分析した。これは、香港粵語や台湾語の書記言語化が書記言語化という座標の上で 進行度や表記法といった軸上で どの位置に在るのかを把握する上で必要な作業である。分析結果については 2023 年 11 月にシンポジウム「アジアのこ とばを綴る」での講演「書けると書けないの間 書記言語化のダイバーシティ」で明らかにした。

(4) 研究成果の大学教育や社会への還元

本研究では、研究成果を学术界に対して発信するだけでなく、大学教育や社会に還元することも重視した。東京大学で担当した香港文学や台湾語文学を主題とした授業では、書記言語化について得られた知見について受講者と共有した。また、『漢字文化事典』(2023 年)の項目解説「大航海時代の欧文文献中に現れた漢字」では、早期の文献に見られる閩南語の特徴的な語形を記した字体について言及した。

< 引用文献 >

吉川 雅之 (2020)「港臺本土語言書面語言化在一九九〇年代中期以後之動向」、『中國語文通訊』99(1): 195-213.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 30
2. 論文標題 書けると書けないの間 書記言語化のダイバーシティ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Language, Information, Text	6. 最初と最後の頁 134 ~ 136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 17
2. 論文標題 粵語 (広東語) に特有な語形の漢字表記に見られる特徴 日本国内刊行の市販語学教材を通して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 7 ~ 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 古壮字を利用したチワン語研究の危険性と可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本漢字学会第5回研究大会予稿集	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 182
2. 論文標題 粵語 (広東語) 教材史概観 日本国内刊行の市販教材を対象として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東洋文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 330-269
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 31
2. 論文標題 《英語集全》加口形字攷 以 切字撮要 /e/系列韻母爲主	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Journal of Chinese Character	6. 最初と最後の頁 1~30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14772/CSCCK.2021.31.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 吉川 雅之
2. 発表標題 書けると書けないの間 書記言語化のダイバーシティ
3. 学会等名 東京大学大学院総合文化研究科・言語情報科学専攻創立30周年記念イベント 第1部シンポジウム「アジアのこぼれを綴る」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉川 雅之
2. 発表標題 古壮字を利用したチワン語研究の危険性と可能性
3. 学会等名 日本漢字学会第5回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉川 雅之
2. 発表標題 關於粵語書寫歷史分期的構想
3. 学会等名 跨粵 跨領域粵語書寫研究國際研討會(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Michela BUSSOTTI, Francois LACHAUD, Dejanirah COUTO, Rui Manuel LOUREIRO, KISHIMOTO Emi, OSHIMA Mikio, Henning KLOTTER, Hans-Jorg DOHLA, Maria Teresa GONZALEZ LINAJE, YANG Huiling, Mariarosaria GIANNINOTO, Eugenio MENEGON, Marten SODERBLOM SAARELA, YOSHIKAWA Masayuki	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Ecole francaise d'Extreme-Orient	5. 総ページ数 503
3. 書名 Mastering Languages, Taming the World: The Production and Circulation of European Dictionaries and Lexicons of Asian Languages (16th-19th Centuries)	

1. 著者名 日本漢字学会（編），吉川雅之など（著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 648
3. 書名 漢字文化事典	

1. 著者名 庄司博史（編），吉川雅之など（著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 430
3. 書名 世界の公用語事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------